

照葉樹林における種子散布者としての サル の 役 割

高槻成紀（東京大・総合研究博物館），

蒲谷 肇（東京大・秩父演習林）

房総半島の高宕山において1994年11月から1995年12月までに採集されたサルの糞のうちT1群の60個を分析した。一年を通じて果実が多く、40～60%を占めていた。糞から検出された種子のうち14種が同定された。これらはほとんどがある月だけにしか出現せず、連続的に出現したのは長いものでも3カ月にすぎなかった。つまり高宕山のサルは次々に熟す果実や種子を次々に食べつなぎながら、一年を通じて多様で恵まれた食物環境に生息しているといえる。

季節ごとの特徴は次の通りであった。1994年の冬には果実のほかにイネの籾がやや多かったが、1995年には少なかった。そのほか草本の葉や茎も多かった。春は果実のほかに木本の葉の新芽が目立って多かった。夏には果実が61%もの多くを占め、そのほかには特に多いものは見あたらなかった。秋には果実が65%と最も多くなったほか、種子も13%と一年のうち最も多かった。また動物質（ほとんどが昆虫の成虫）が11%とこれも一年で最も多かった。かわりに木本・草本の葉は最も少なかった。

当初の目的である種子散布者としてのサルの役割については、今後さらになすべきことが多いが、現段階では次の2点を指摘できる。1) 種子はサルの糞に一年中確実に入っている、2) 種子にはヤマグワ、クマヤナギ、イヌビワなど林縁ないしギャップに生育する種が多かった。

ニホンザルの採食パターンとヤマグワの反応 綿貫豊、中山裕理（北海道大学農学部）

樹上性の霊長類による採食は森林動態に関わるひとつの要素として注目されている。下北半島北西部では、ヤマグワの冬芽と樹皮は積雪期間におけるニホンザルの主要な餌の一つであり、ヤマグワはサルによる採食によって、長期的な生産性を変化させるという証拠が得られている。本研究は採食圧がクワの生産性におよぼす影響を明らかにしている。最終年度として、M1グループを1996年12月下旬より1995年1月中旬まで追跡し、M1グループは易国間川流域、ARAグループは奥戸川流域を遊動域とすることを明らかにした。

この地域内において、サルがヤマグワを初めて訪れたときには1年生枝の3分の1、2回目には75%を食い、2回訪れると冬芽の60%を採食した。長い1年生枝を選択的に食う傾向があった。1年生枝当たり食われた冬芽数は、枝間でバラツキが大きく（分散の4～35%）、食われやすい枝があるとおもわれた。いっぽうで、1年生枝の根元の冬芽は食い残されることが多く、2回食われても、75%の1年生枝で少なくとも1つの冬芽が残っていた。食われた1年生枝で食い残された冬芽の生存率（65%）は、同じ木の食われなかった1年生枝の冬芽の生存率（48%）より高く、補償生産性を示したが、残された冬芽が生産した翌年の1年生枝の長さには差はなかった。したがって、ヤマグワは短期的には冬芽の生存率の上昇、長期（4年以上）的には長い1年生枝の生産によって、サルによる採食を補償しているものと推察された。